



八達印  
2257  
11

池



繪本烈戰功記卷之十



目錄

長坂長閑失目面本

信玄任大僧正而有和歌會本

武田家勇士教言固於寺外國

信玄賞花而祿歌國

信玄攻和國之城本

横田十郎兵衛武勇之圖

別我力已卷之十一

和村



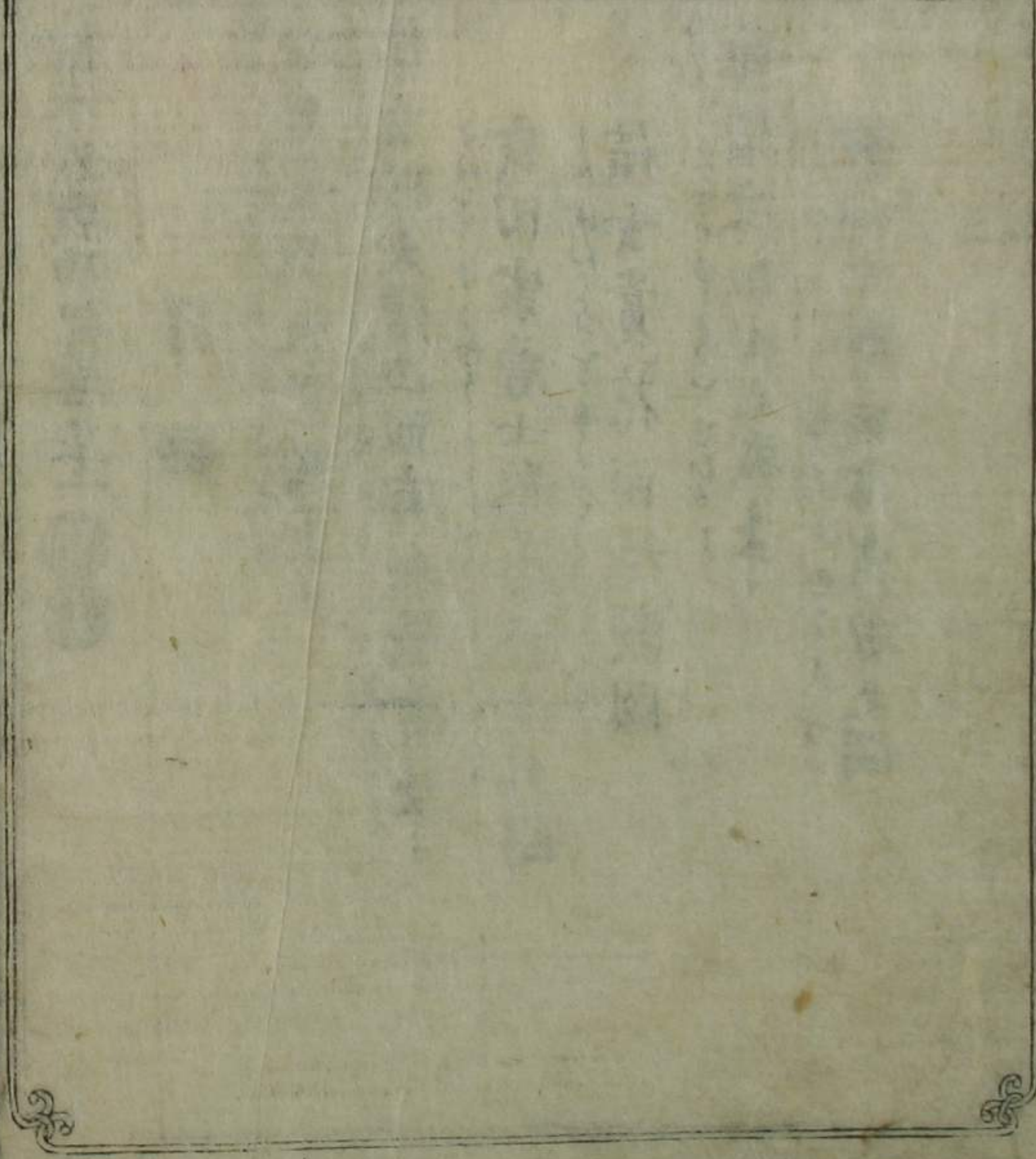


繪本烈戰功記卷之十一

長坂長閑失面目事

第

史邪々いふ勝ず。妖の徳は消へて事。千古の格言はて。志士の  
 心を破て迫りて。愚夫の心を破て。及て遠く。取持賢愚乃  
 うらひ。末に於て。萬里を。君子夫妻と。おのづから。あはれ  
 も。回改を執者。元畏の口説。又宗而。初。妖と揚。奇を  
 時。忽。道棄。其城。は。と。下。民。と。証。仁。義  
 有。充。塞。と。け。時。又。至。て。智。士。仁。人。出。と。一。舉。又。制。る。事。能。は  
 ら。と。作。り。て。亡。國。の。端。と。又。至。る。嗚。呼。是。妖。と。忌。む。る。事。を  
 神。の。助。を。行。も。守。佛。の。志。成。れ。と。あ。れ。只。王。將。の。明。徳  
 依。又。其。頃。甲。及。西。郎。十。日。市。と。り。所。と。徳。嚴。と。り。若。り





山

僧も亦依信とて守り山伏も亦信とて只言山靈達之信  
 て其靈驗奇特と従て俗民を驚せし世に送りたり。其時  
 甲兵市川の文殊へ観て夢想又八卦と相傳へり。吉凶河  
 連得夫を論て俗耳と驚せし。諸人崇敬而トと云事  
 連信とて絶ど。昼夜とて群集したり。又徳最忍  
 信雲の富と得たり。是又徳最長坂長保又依武田の連系  
 又ありん事と云事。折れ長坂長保長保又依武田の連系  
 信云幻術の術より出たて顯女覚あり者なり。其時  
 欲心熾盛なり。されば金銀を以取入を何事より許す  
 云。取入を許す。亦好智の徳最。其時解と知が故  
 教多の黄金と呈て取入あり。長閑疾も許す。時を待て執

性

おる也。此の分の謝おと獲と工あり。一夜亦伽よ死出たり。其  
 信云殊更氣を能治成て取入を許す。亦好智の徳最。其時解と知が故  
 云と得るとあり。ひて徳最が妙術を披露し。其未だ  
 其徳事神。如くよ。初者とて。折れ信達。其時解と知が故  
 らも終る。其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故  
 されば。信云聞本。其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故  
 何事の学授とて相傳せり。其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故  
 者市川の文殊堂へ籠。其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故  
 其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故  
 速て其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故  
 坂近とて呼んで。其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故。其時解と知が故

授

山伏力記

三



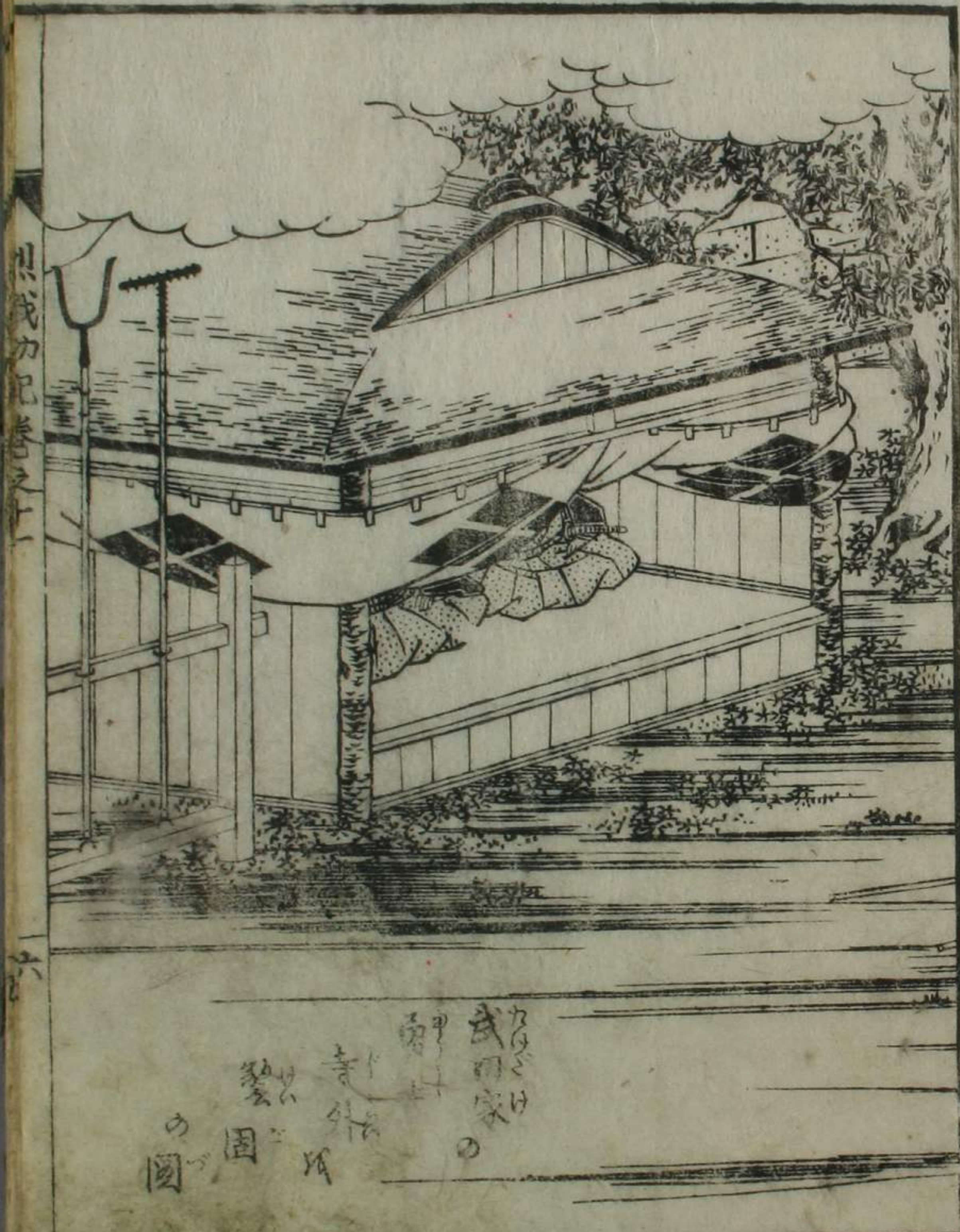




三世又通じらるる。又彼九條の現をむらりし屋院しく郭殿で  
 恥ぢしとゆふ。又天道の山をみとて。人間六十年の  
 身をたれりちる。身とて。清人の公と接んと  
 彼を毒域とて。其後やまはれて。よき寿終をひひ。はみ  
 虚成実やうな後が。又。面白く聞くと。孫を認るるなり  
 されども彼実の乃よ遠が故。又故下とて。有る。一交は先  
 聞ゆ。のなけきども再新者の事。惟もあま。平あくと。云出  
 ん者。の曲じらる。と有る。い。さ。も出改の長坂。毛。保。あ。も  
 面目うく。赤面して。居る。り。ぢ。あ。ふ。  
 有。信。云。任。大。僧。正。而。和。歌。會。之。事。  
 永。建。九。年。正。月。十。三。日。武。田。晴。信。入。道。信。云。と。大。僧。正。に。任。ぜ。ら。る。

ろの勅使として。以。叡。山。明。王。院。の。阿。闍。梨。倫。吉。有。捧。て。甲。府  
 よ。下。着。ら。る。是。三。條。大。中。將。の。執。し。ゆ。人。が。故。よ。王。上。正。親。所  
 院。より。し。ゆ。人。の。如。き。信。云。悲。愴。あ。り。め。り。け。り。殺。而。倫。吉  
 と。頂。戴。ぬ。ま。よ。り。餐。應。さ。ぬ。く。有。る。ま。よ。り。長。後。院。に。て  
 阿。闍。梨。有。京。師。を。送。ら。ま。り。る。ま。よ。り。て。國。家。安。全。の。為  
 緒。寺。法。山。と。て。大。法。秘。法。と。修。せ。し。れ。又。館。に。於。て。天台。宗  
 言。の。倫。儀。有。或。い。惠。林。寺。長。得。ち。の。名。僧。と。而。別。め。入。室  
 院。得。ち。の。佛。事。を。終。り。し。れ。り。る。が。ま。よ。り。信。云。と。信。持。し。て  
 惠。林。寺。長。得。ち。と。い。は。れ。し。寺。より。信。云。と。信。持。し。て  
 時。宗。一。蓮。寺。より。和。歌。の。會。と。具。り。て。信。持。し。て。信。持。し。て  
 既。又。日。限。お。さ。り。し。ゆ。唯。信。と。い。は。れ。し。如。へ。都。より。今。出。







友大長公度公下向一のひぢれだ。一連寺大又收ひ。軍邊  
 館又借跡幼大炊少。系隼人佐又轉て。け否兼亭左府公所  
 下向又好。太守の直お付二借持仕交ひ。け既伺奉ひせ  
 中出なと。信玄聞一品を平がお付又兼亭公派定つるふ  
 如何ありと。辭酌有ちん。儲子四も形りなと。武田丈僧正信  
 玄一蓮ちふ入せきなれ。小笠原慶安。板坂法中。一華堂一向  
 宗の長円寺お付お伺候と。平外吐尻より。岡田雲龍寺の  
 南安長板長閑。平外檢校あど加て十二人。次の座ん。信玄  
 の舎弟。信連入道道遠軒。左馬助信多。伊奈四郎勝頼宛  
 山仔豆守信良。武田兵庫助信實一條右衛門太左衛門  
 以上十二人の一門列座す。極例よふ。大倉太左衛門亮在番

長命

察



不在傍門。長命勤在傍門。以下の猿乐共伺候と。豫系  
 の又人として寺内と發廻り。俣守庵遠山右了介。今井  
 九兵衛の三人も。同心三十人引率。又人の監と。佐又寺中と。密々  
 又示歩以。伊豆云。藩小池主水。武井右左衛門海田外紀。切田  
 勤之丞。又足將大將市川梅中。横田十郎兵衛尉。系子左衛門  
 尉と。は係。勝るて同心足將引包。寺外四方と。おまの。非常  
 の狼藉と。復し。登固。嚴重ふして。式法古實と守せり。慈子  
 介。中川丸庵公秀。公由。供儀と。案内も。あく。東裏の門と  
 作らるり。今日和歌の由會と。承り。おる時。若より。向  
 せり。素より。さるも。益をよる。傍若無人の勢。強と。なり。て。書



左大臣公彦公下向のひぢれを。一蓮寺大又收ひ。平遠  
館に宿跡於大炊少。系隼人佐又轄て。以公兼亭。左府公所  
下向の地。太守の所お休。宿待仕。以公。以公。奉以。せ  
中出なま。信玄聞。一。器。平。お休。兼亭。公。所。向。公。  
如何。あり。と。辭。酌。有。ち。の。備。子。日。も。形。り。は。武。田。大。僧。正。信  
玄。一。蓮。寺。小。入。せ。き。り。れ。小。笠。系。慶。安。板。坂。法。中。一。華。堂。一。向  
宗。の。長。円。寺。お。休。休。小。伺。候。と。平。外。吐。流。し。岡。田。聖。徳。寺。以  
浦。安。長。板。長。閑。外。檢。技。あ。ど。加。て。十。二。人。次。の。度。は。信。玄  
の。舍。才。信。連。入。道。道。道。道。軒。左。馬。助。信。孝。伊。系。四。郎。勝。頼。元  
山。伊。豆。守。信。良。武。田。兵。衛。助。信。實。一。條。右。衛。門。太。丈。信。頼  
以上。十。二。人。の。一。門。列。座。す。極。例。と。大。倉。太。丈。同。亮。在。信

約

好長  
219

家

門。宮。増。孫。右。衛。門。長。今。勤。左。衛。門。以。下。の。猿。木。共。伺。候。と。塚。系  
六。右。衛。門。相。川。甚。又。兵。衛。助。笠。井。半。兵。衛。三。尺。四。郎。兵。衛。板。本。武。兵。衛  
の。又。人。を。監。正。て。寺。内。と。致。廻。凡。休。庵。遠。山。右。衛。門。今。井  
九。兵。衛。の。三。人。を。同。心。三。十。人。を。引。率。又。人。の。監。正。と。休。寺。中。と。密。々  
又。示。歩。凡。伊。豆。玄。蕃。小。池。主。水。武。井。右。衛。門。河。内。外。紀。切。田  
勤。之。承。又。足。輕。大。將。市。川。梅。中。横。四。十。郎。兵。衛。尉。系。子。左。衛。門  
尉。と。は。係。務。と。て。同。心。足。輕。引。色。寺。外。四。方。と。お。休。の。休。常  
の。狼。藉。と。い。は。し。り。致。固。嚴。重。ふ。と。式。法。古。實。と。守。ま。り。是。し  
介。中。川。丸。藏。公。彦。公。由。供。養。と。案。内。も。あ。く。未。喪。あ。り。と  
作。ら。ま。り。ら。ん。今。日。和。歌。の。在。會。と。あ。り。形。る。時。若。又。下。向  
あ。ら。ま。り。さ。ら。も。毎。々。と。い。ふ。傍。若。毎。人。の。形。若。と。い。ふ。は。り。と。い。ふ。是。日

聖職神書



とて中野推系任はと有られた。信玄大に悦ばれて葉亭とて  
上座と請ふ。然て題を何各録出され  
兼題を松同花よりせられ信玄

かく録せしむるは信玄の秀逸と聞えたる。兼亭公を介し  
お侍の人々の詠歌を畧し披瀝。其の終りなれば信玄の  
武後三河守教而食事の時刻を。南下信玄相侍衆の中  
とて寺尾南庵近く召きて不圖思ひ出たるところをあれ  
遠光院へ約く。雪山和尚と違而宋梅洞のこゝの何きの書  
出の事聞而返るべしと命せしむるは寺尾教而返りて又膝  
退くと遠光院へと出約ける。其の約は信玄武後よ命せしむ

信玄の時刻はと互けき。武後承而程なく配膳を。土登平八良  
曾根孫次郎。三枝宗次郎。佐宗四井玄清給仕と勤む餐石  
若成重の盛饌を。一庭碎と和して高座即奥の詠  
吟を申刻及び信玄機嫌よく飯成りされば。兼亭公も旅籠  
へどぬりぬ。兼又信玄寺尾南庵とて雪山和尚へ召らるる。宋梅  
洞とて林和靖のこゝあり。和靖の世は鎌唐といふ如の人あり  
名と通と号と少して孰とあり。志気文学と刻性。信玄よとて  
好む。兼又榮利とまき。其の終りなれば。又常とて待  
折紙と。奇向最多。或人其侍と勤せんこと。信玄とて  
曰予將又あり。其悔とて安世も名ある。其を引んやとて  
其の事あり。仁宗の時は率以和靖先生と益す

信玄の時刻はと互けき

武後



まよりして林和靖と号する。林の氏をいふ。著述あり。又没後集するも有。省心詮要、林和靖集、法帖、共通判帖、林通帖、林通二帖、林通手書雜書、  
 其の書世に曾爾梅と号する事甚しく。草堂梅樹小園、遠西、其名も附し、董まり、宋の世の賢人の号せし梅師、宋梅と云。洞の其幽居の名、雪隠、灸する身、句多、中よ、かて元祐の頃よ、

陳影横斜水清淺 暗香浮動月黃昏

とく名を吐く。雪山和尚、句以書て寺塔よりあられり。遠光院近の行程。三里余も有る。寺塔の西の下刻、甲府より看。雪山の返事と掛けまは信玄、寺塔の方と向き

稿

海

らいて。寺の暇とぞ終り。寺の信玄、山縣三郎兵衛、作らる。予、今日然す。寺塔と雪山、方へ違たり。不意、柔亭殿の来興、故彼一蓮寺僧もむらりて、言、盛ホの准俊も人、教合せらる。其余、有ま、さる。若然、ある。信玄、京師の貴客へ對し。信玄、舩辱され。宋梅洞の儀、おはき、人、成、世、たる。ら、山縣と、近習の士。信玄、の、事、又、嚴、の、成、合、り、と、信、玄、甲、信、の、太、守、と、て、以、る、食、衣、又、近、を、用、ら、る。常、士、氏、と、懐、ふ、と、知、ぐ。予、頃、禪、の、長、老、と、信、玄、の、兵、衛、主、の、備、首、孔、昭、と、以、つ、て、云、り。彼、孔、昭、が、兵、を、用、り、事、に、率、て、極、儀、と、有、る。數、万、兵、軍、お、と、而、一、豆、の、食、が、得、く、も、虎、と、信、玄

川内成力已卷之十一

七



して食一掃の酒を得て流し鐵で士と均く飲す。士卒  
煖ぐれば大将食せだ。諸軍雨露濡る時ハ油幕河張り味  
を諸士の后より承て熱を承人の先より熱ふ。夜ハ通夜睡  
忘る。自故と廻て懈まるを戒。昼ハ後日一面を拓くが  
眠まじく而末須更も心と忠以て必死安せだ。是より依て  
子北軍勢。仍十万といふも。心と一致し而死と極くは鼓  
歩て進べた時ハ必死と極くは退く事。一歩を  
命は遠く入事なりといふ事。故の仲達作之聞て孔明生を  
ん限り。蜀も勝事。努力を盡くす。然れ孔明が心と軍意も若  
がと戦敗不忘ま。必病なり。其弊も衆て戦ふ。亦勝事と  
得べしといふ。果爾孔明病ハ臥事七日。而遂ハ惟幕の裏

月

海

に没と。信玄の兵よ心を周らさず。良お似たり。和歌の會  
備待せしきて。心ハ敏るべしと思へ。氣をいひて。亦如の  
故ハ往々隔の病と多し。遂ハ病床ハ臥。一年月下旬。惠林  
寺の奥より上求ちの不動尊へ。来るを告ぐ。惠林寺の智勝  
圓作より使傍を以。持寺も立より。せ終るべし。と。カレ  
バ。信玄近口出陣の準備ハ以間。攻取のハ寛く。未會中  
を。五寺を。四河を。而使傍を送り。け頃。支那の  
橋。削ぐ。別。必の下。は。座。成。ま。り。け。待。た。る。万。何。卒  
は。入。セ。の。月。が。希。い。と。カ。出。ら。ま。ち。れ。を。信。玄。聞。し。の。こ。こ  
を。た。と。ある。よ。希。く。さ。ぐ。らん。心。を。た。業。あり。と。遂。ハ。惠。林。寺。へ。立  
より。圓。作。一。掃。五。く。彼。必。下。此。座。を。坐。り。良。死。と。お。ら



信玄  
花  
賞  
歌  
録  
園



武田信玄 卷之十一

十



まし。土屋平八良と召て料紙争と乞きて。信玄

うそをばをちやかすま。此のたごころん去のてつる

新思られらる。智勝國師の威賞しく。押

傍よりせしむ。皆勝りて是とね。感吟の

と。使川大通智勝國師

太守愛櫻女蘓玉堂 惠林亦是鶴林寺

其外ハ是と四谷

信玄其兵隊用方よりて。國政とれはなり。其死律の

將士氏とあましく向背をしむ事。實は先武侯不

代の名將と云べし。又

人々城人の石見人等。地情の味方あり

は

此致万世の勝矣。兵家殊に賞むるあり。是孟子の所  
謂氏と城と封疆の界を有るなり。國と國と山谿の險と  
天下を威す兵革は利刃の如し。道と得者の助多し。道  
考の助寡。助寡の如し。親戚之助多し。天下一之順  
と。意これに附合は。於噴ど。文二道乃名將と  
詩作多。翻たり。其一は

新正に號

淑氣未融春尚遲 霜辛雪苦豈言詩

此情愧被東風咲 吟断江南梅一枝

又

風送鶯寒意結加 梅邊吟履月横斜



因思香雪齋前夜

春若有情吾約花

旅館聽鶉

空山綠樹雨晴辰

殘月杜鵑呼夢頻

旅館一聲飯思切

天涯瞻戀蜀城春

これ佐玄十八の祖なりと。曾て京師の如くは葉巢志仲庵曰武庫韓白為之春旗新國曹劉為之棄甲と

これより。実文といひ武といひ。兵家中奥の秘と稱するも宜也

又佐玄の父佐虎ハ乃先年上洛をてより後ハ彼葉巢公の技助とてけく。在京小年月ハ。花曹小生衣此社ハ紅葉の露とてけつていふ尾の秋とてい。彼は花の

香風とては乃春とて。心ゆくは旧所抑るる

が。今年永禄九年此月。又。密意と甲府へ中送らる。意振い去永禄七年三月。佐虎上洛の物。市館義頼公と。取獨して退出の節。義頼公廣極まで送り出のひき。その時佐虎平伏して。武田家へ入限る。是と旧例とあり。後多し

佐虎子孫又傳へ家乃規程と仕んを。退きしれ。猶去年八月。三好松永未達心を企。不意は佐虎を取。義揮公と自殿まじめ。定而は大變。疾甲府へ入。聞かん

どつめど。佐虎情懐ひい。佐玄は上洛有て。佐虎の妻族と云ふ。義兵は揚て運使と誅し。四海一統の功と云。ところべし。時不的まると有て。其奥意と毎年の密

川内助也



信

上見和田の城を推す。時これ永禄九年秋七月  
 上旬也。遣兵一万三千余騎。諸將各上洛と急ぐ。然中越國の上杉入道藤伝。先  
 細川上野乃書翰以得てより。先隣國の小城を攻落。眼  
 乃痛と對て。國家と固執。上洛又執んど。先武田の要害  
 あり。かくて和田乃小城とめ。武田の猛將されを。上杉が一万三千余騎乃  
 大軍と茶堀のくえし。徳と矢順と。矢後同  
 一。同又押ひきて。猪りたる。矢の精兵。やりのと。推  
 篠づく。に射中し。猛威乾坤を震い。矢叫の。山岳  
 乃軍死。賊兵の。機。此も。捕と。射

新

謙信攻和田之城事

足利義輝使せし。進ぐ義兵と。遣使。諸侯大功と。秋也。信虎され  
 にも。老て。も。信虎の。信  
 也。きく人。信又。信



向の紐をかじ。或は飛箭を切て落し。多しく勢を掃へ。攻  
 寄しく。己一方と乘破らん。城將和同左衛門。武田の武威  
 孤墜せ。諸率も必死と示し。其方も己も死に候と。四  
 方に下知して透るもなく。汗血が流して防ぎ難く。城兵  
 輝虎入道謙信が鋒も敵し。今平け城陥落しく。城兵  
 一挙も首を飛こんどとぞ見えたり。爰も甲冑より如勢を  
 志す東門より。横田十郎左衛尉。二日以前も入陣而搦り  
 雖も固て有けり。寄りて大軍隈もと取捨己も城際も血  
 ごとく。今の防戦形盡さ。然れども今令いし。横田十郎  
 謙信が腹を挫ぐんと。謙信が向いし。搦りたり。搦り  
 屹とえ定め。究竟の足怪と方右又後。我銃炮を筒改と定め

打元

謙信が首を斬りて。五里と惜ず。横田十郎左衛尉。二日以前も入陣而搦り。雖も固て有けり。寄りて大軍隈もと取捨己も城際も血ごとく。今の防戦形盡さ。然れども今令いし。横田十郎謙信が腹を挫ぐんと。謙信が向いし。搦りたり。搦り屹とえ定め。究竟の足怪と方右又後。我銃炮を筒改と定め

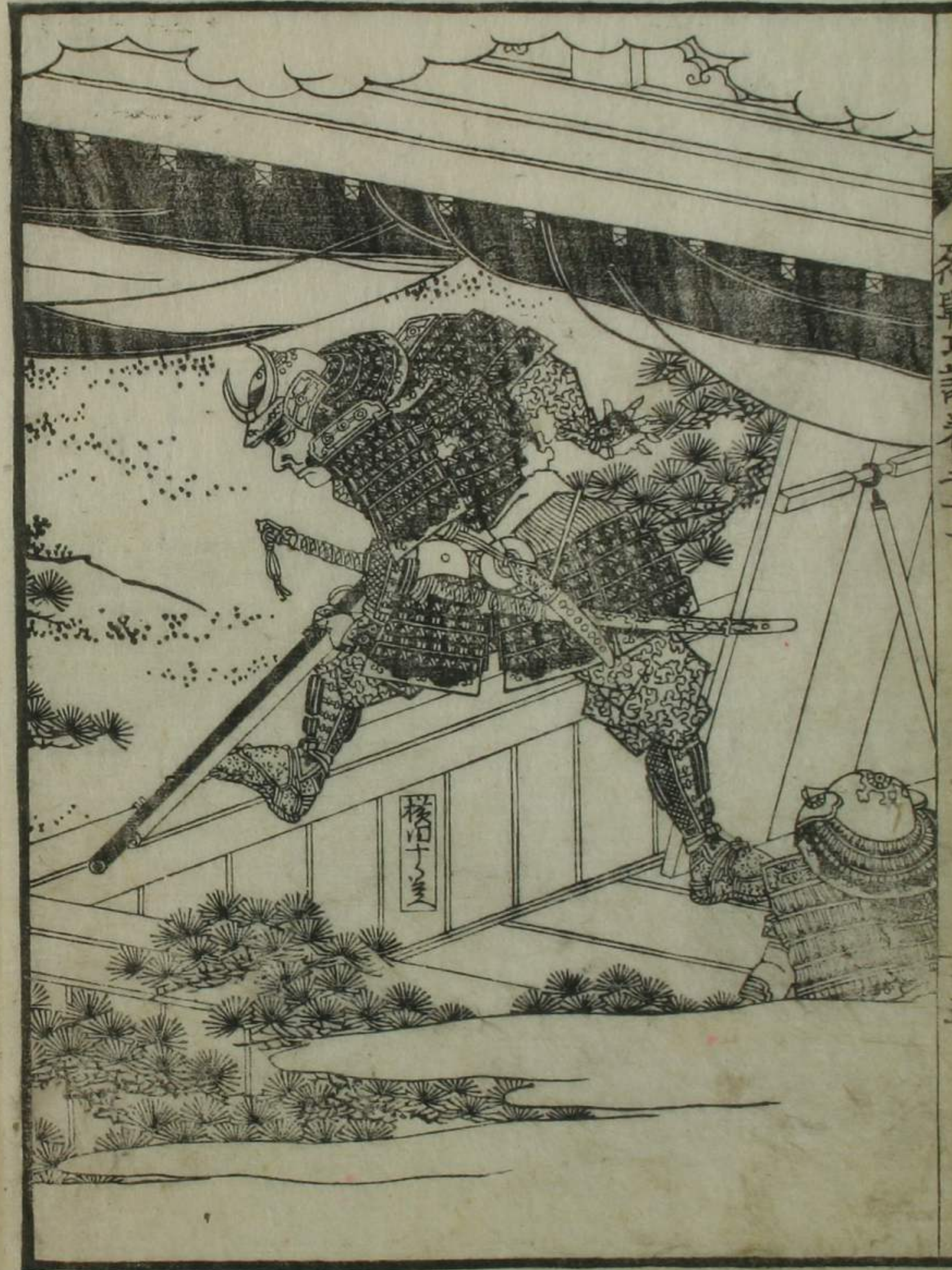
怯

と。先ず兵士を指とす。次第くは跡退る。大將謙信大お  
 怒り。新込仕寄。軍器を。僅の銃炮も捨て。今更武名を搦  
 る。遣者共。平に候。相言。城際近く。我身も。左右も。雷石猛士。今も必死と  
 心を。我方と先定す。横田の。一

神



横田十郎兵衛  
武勇の図



武勇の図

横田十郎

十五



雷雨震い。狭間一ツ又入挺高の銃砲と稲妻の如く伝へて  
その凶なりと打出れり。吻次のひまを、膝の男を、合衆の  
三寸息の絶と傳。かゝるるほどよ。と杖の常士百二十騎まで  
打撃され。銃丸係佐とありす。半數回され。此の係佐  
三死せり。己よりあつくるる。而く。小姓并地家助を即  
近來つて。る。あは寒く。射る。産場は、大おの向いせり。す  
え。け小坂一ツ落さる。とも四海一統の害ともな。千鈞の勢ハ  
難崩の爲は、搦と殺せんと。る。れに、紅て押ま。後、改とに  
て引。係佐も、れ。む。れ。と。あ。れ。る。連。田。と。ん  
諸軍を、喚。と。引。い。甘槽。近。江。守。と。殿。して。城。後。攻。め  
ぞ。級。改。ある。和。田。の。陣。中。り。諸。軍。翰。を。れ。殿。と。出。撤。返。の。味。

解 細

得る。ぐ。心。地。と。万。死。と。出。一。生。保。半。金。横。田。が。武。功。よ。れ  
こと。感。嘆。と。ぞ。送。ける。此。横。田。十。良。去。清。と。い。る。る。彼。名。を。ん  
原。貞。法。守。入。信。岩。が。長。ふ。て。以。希。原。貞。次。郎。と。い。ひ。た。て  
信。岩。は。多。く。有。て。横。田。係。中。守。ハ。男。子。と。い。は。さ。る。が。左。二。の  
貞。次。郎。と。横。田。が。費。女。の。婿。と。な。り。其。家。督。が。信。岩。を。せ。て。横。田  
十。郎。去。清。尉。と。名。を。承。せ。る。也。實。父。信。岩。養。父。係。中。が。武。勇。威  
を。け。つ。死。若。子。の。武。功。右。よ。出。る。の。處。と。嘆。せ。る。也。殊。は。銃。砲。の  
と。得。て。翔。る。下。計。と。も。あ。り。ま。さ。ら。ふ。ほど。の。名。人。あり。が。故。僅。れ。而  
孫。内。外。の。勢。と。も。な。る。な。る。も。な。る。小。城。と。執。り。天。下。と。名。を。冠。す  
拔。傑。佐。が。大。軍。と。追。及。せ。り。半。も。流。石。の。原。貞。法。守。入。信。岩。が。あ。る。の  
け。り。と。諸。人。感。嘆。と。い。は。れ。る。の。武。功。と。た。く。も。十。良。去。清。の。



箕

誰

手前も思て候。新程の働ハ武士の常遊り候。然わも御膳に  
 て有らんと見て。武士六種も秘事をいふ事ありと人々亦之  
 瓜を賣しけり也。備甲房は旅の。城は備後大軍の率て。新田  
 の城を攻めし。昼夜も日々に攻め初るを報聞けり。佐玄去  
 京申後信し。赤坂さんごこと。急ぎ波船あるの如く。横田が武  
 功は後兩城兵早に退散しと。佐を有けり。佐玄さんご  
 後この准儀と。八月廿六日。一万余騎と甲房と雷發五宮分  
 二。上見義輪は着陣也。同十三日。足利参へなきし有て。由良  
 佐法守が居陣。新田の城を攻んと。利根川を渡り。吉靈二本  
 首和同より乱入せり。後波の相討。穴山伊豆公は梅雪と大将と  
 也。佐長は此軍勢と。利根川を渡り。先攻早新田と

寄

押させ。由良が居城を棄た。勝鬨とあけて。又足利  
 働。武田勢は在り。故決し。信長兵士は傷ちれども故に人  
 らは合さるり。佐玄四十余日。義輪は陣前有る。十月十日。飯陣  
 に執りし。信長は。備後が領國に近き。協あり。信長は  
 を是れと。同二十三日。信長は佐法守佐法守と。備後を  
 越中と押のみと。佐州牧の島は一城と築。城代は信長  
 の旨。命ぜり。佐法守。即時は牧の海。堀張と。佐  
 不日又一城と。信長は。信長は佐法守佐法守佐法守。佐法守  
 陣中。の備將。佐法守佐法守佐法守。佐法守佐法守佐法守  
 され。水田。佐法守佐法守佐法守。佐法守佐法守佐法守

繪本烈戦日記卷之十一畢

二七



